

## 【断章】 二次創作鯖がいるFGO

kould

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

※ルール説明

### ＜総則＞

一、特異点（イベント含む）を攻略する度に、サーヴァント「一騎」の召喚権を得られる。

一、召喚にはフリーツールの「抽選王」を用いるものとする。

一、召喚されるサーヴァントは、特異点を攻略する度に一段階成長する。

### ＜準則＞

一、シナリオの都合と筆者の気分により、敵や味方が追加で召喚される場合もある。

一、「クラス呼符」「ランク呼符」を導入する。

一、特定のサーヴァントは、第五再臨の可能性がある。

### ＜変則＞

一、二次創作のサーヴァントを採用する。排出率は☆5未満と設定する。

追記：「最初の一騎」のみ、筆者の独断と偏見である。

# 目次

※冬木はアニメ通りの展開でした。	1
RPGのレベル上げは大好きです。	14
マテリアル：キャスター（擬似英霊）☆4	19

※冬木はアニメ通りの展開でした。

人理継続保障期間 “フィニスールカルデア”。

本来は相容れない筈の「科学」と「魔術」が、『人類皆兄弟』という建前で以て、『アイツらには負けたくない』という本音を包みつつ手を組んで人類の歴史を過去・現在・未来に渡って観測することで、人類の存在を証明する。「地球、若しくは世界を観測の対象とした天文台」と喩えれば良いだろうか。

しかし、カルデアは現在その通常任務を休止させ、緊急任務に就いている。

何者かによって強行された “人理焼却” によって、世界はカルデアを残して完全に消滅。歴史を人間の手に取り戻すため、偶然にも生き残った十数名のスタッフと、奇跡的に英霊と融合した “デミ・サーヴァント”、只の数合わせで招集されていた一般人 “人類最後のマスター” は、7つの時代の転換点——通称 “特異点” を巡る旅に出る。  
グランドオーダー “聖杯探索” は、まだ始まったばかり。未だ箱船に道標はなく、只あてどなく彷徨うだけだった。

...

秘匿技術の塊であるカルデア研究区画の中でも、とりわけ最重要機密として扱われる部屋が複数ある。その一つである「英霊召喚場」の三重ロックを、臨時所長となったロマニ・アーキマンはあっさりと解除した。

「時間も人手も物資も足りないというか、そもそも無いんだ。機密とか秘匿とか、なりふり構っている場合じゃないからね」

「でも、正直意外です。あのヘタレが代名詞だったドクターがこうもアッサリと——」

「——うん、僕も自覚あるからそれ以上は勘弁して……」

「あはは……。ええとドクター、この部屋って冬木で作ったサークルと同じ？」

「ああ、そうだよ立香くん。丁度この部屋が霊脈の真上だから、同じようにマシユの楯を設置すれば完成さ」

「では早速、――召還サークル起動します、先輩」

カルデアの白衣姿のマシユが、デミ・サーヴァントの能力を限定解放し、自身の（元は名も知らぬ英雄の）楯を機械に据え置く。数秒ほどで、魔力の粒子が沸き立ち、現世と「英霊の座」を繋ぐ門の魔術式が展開された。

展開に異常が無いと確認したカルデアの技術部顧問、レオナルド・ダ・ヴィンチちゃんは、早速「人類最後のマスター」とならざるを得なかった少女、藤丸立香をサークルへ導く。

「さて、のんびりしても居られないし、早速召還といこうか。只まあ、今のカルデアには碌に触媒も無いから、一人目は当てずっぽうになるけどね〜」

ハイ呼符。と、ダ・ヴィンチちゃんはサーヴァント召還の詠唱と魔力を圧縮した魔術符――金色の「呼符」を立香の手に押しつける。投げ遣りなチュートリアルに狼狽える少女を見かねて、ロマンが助け船を寄越す。

「始めの一人――いや、マシユが居るから二人目だけど、今はどんな人物でも良いから人手が欲しいね。寧ろ厳しい状況だからこそ、『強い英雄』より『一緒にいてくれる』人をイメージして呼べば良いんじゃないかな?」

「はいっ、ドクター!」

意は決した。ならば無心で呼び掛けるのみ。

優しく放たれた呼符が楯の上で魔力に溶けて、抑止の輪より護り手を召還する――

「サーヴァント、セイバー。召還に応じ参上した。問おう、貴女が私のま、すた……あー」

「あつ（歓喜）」↑立香

「あつ（警戒）」↑マシユ

「あつ（驚愕）」↑ロマン

「あつ（愉悦）」↑ダ・ヴィンチちゃん

ーするのだが、今回ばかりは間が悪すぎた。

...

「そ、その節は誠に申し訳ございませんでしたあ！」

金髪美少女（王）による美事なまでの五体投地。「ゴウランガ!!」の幻聴でも聞こえそうなものだが、生憎この場にはニンジャもサムライも居ない。

「わわあ！ 顔を上げてくださいって、折角来て下さったのに怒ってなんていないですから!?!」

「しかしこのままではケジメが……斯くなる上は、自害してもう一度アヴァロンからのダイレクト召還を——」

「だめええええ!?! マシユも押さえるの手伝って！」

「は、ハイ先輩！」

今度は聖剣を取り出して切腹の構えである。……この王様、日本文化に詳しすぎではなからうか。

~~~~しばらくお待ちください~~~~

「……重ね重ね、失礼致しました」

「違う意味で心臓に悪いよもう……」

『『魔力放出』で何度も吹き飛ばされました、さすがは最優のセイバーです……』

ようやく「狂化（E——）」から快復した剣士は、世界を背負ったマスターに向き直る。

「改めて挨拶をーサーヴァント“セイバー”、アルトリア・ペンドラゴン。この時より、私が貴女の剣です。以前は敵となった非礼を、三倍にして返上しましょう」

「うん！ ヨロシクねセイバー」

「よ、よーし。何だかぐだぐだしたけど、ともあれ一人目からアーサー王を呼べたのは幸先が良いぞう。この調子で二人目も呼んでみよう！」

「じゃあ、コレだねー！」

元気よくマスターが取り出したカードは、先程アルトリアを召還した呼符とは異なるものだった。

「マスター、それは？」

「えっへっへ。キャスターの兄貴がくれた『クラスカード』！」

呼符の裏側を見れば、〃キャスター〃のクラスを示す老魔術師のセイントグラフが描かれている。確かにこの呼符を用いれば、キャスターのみを狙って召喚できそうだ。

「しっかし凄いね兄貴、消えるまでの十秒ちよつとでこの呼符作っちゃうのだもん」

「自身の存在が曖昧になったことを逆用して、『クー・フリーン』の霊基を削り『無色の魔術師』として加工する……見事な手際でした」

「やはり、ケルトの大英雄は伊達ではありませんか。私はキャスターとしての彼は初見でしたが、あれだけのルーン魔術ならば、これからもきつとマスターの助けに——」

「——あー、それがさ……」

『いいか？ 餞別でこいつはくれてやるが、その呼符で俺を呼ぶんじゃねえぞ。俺の本領はランサーだからな！ 判ったか、絶対だぞ！』

フリじやな——（消滅）』

「って言ってたから、多分キャスターじゃあ来ないと思うの。少なくとも昨日の今日じゃ絶対」

「ランサー、面倒見が良すぎるのも考え物ですな……」

「ど・は・い・え、今回ばかりはその気遣いが有り難い。シールドダーにセイバーだから、ここは後方支援型のキャスターでバランスを整えたいからね」

「よーし、キャスター出て来いやあー！」

『先輩（マスター）、女の子がしているいい発言ではありません』

野蛮な叫びとは裏腹に優しく投入された術呼符は、2，3回バチバチとスパークした後、人型を作り出す。

「あれ？」

「えっ？」

「おや？」

その人型を真っ先に目視した三人娘が発するのは——疑問と困惑。

何故ならそのサーヴァントは、

「よっし、召喚成功！」

淡いベージュのスラックスに、濃い青のジャケット、

「僕は……うん、キャスターのサーヴァントだ」

黒いマフラーを緩く棚引かせる、

「真名、坂井悠二」

現代日本人の少年にしか見えなかったからだ。

「人理救済、僕も協力するよ。マスター」

・・・

何も見えない、何も聞こえない、何も触れない、何も嗅げない、何も味わえない。

何も、何も、何も、感じない。

だれもいない、ナニモナイ。

「全く、探したぞ」

——ごめんね、今は何時だい？

いいや。〃彼〃がいる、〃僕〃がいる。だったら〃彼女〃も、どこかに……。

「……西暦2015年、だった時代です」

——何があつたの？

「〃人間の歴史〃そのものが焼失した。僅かな〃歪み〃だけを残して、世界そのものが『なかつたこと』にされた」

——いったい誰がそんなことを？

「未だ解明には至っていないが、これだけの茶番をやつてのける力と思考の持ちは、まあ自ずと限られるさ」

——僕には、何ができるかな？

「それは、お前自身で決めることだ。だが——」

——？

『お前が如何なる選択をしようとも、我々はお前の欲望を尊重する』

——つ、ありがとう。……〃歪み〃への対処法は？

「〃歪み——いやさ、特異点〃に直接干渉することは、焼却された我々では難しい。しかし、異変発生する直前の段階で、特異点調査の準備を進めていた研究施設がある」

——その場所は？

「人理継続保障期間 “フイニスIIカルデア”。当然ながら、此処も犯行者の襲撃を受けて壊滅状態ですが、唯一生存した “マスター” が、歴史上の英雄である “サーヴァント” を連れて、特異点の一つを正常化させたようです」

——カルデア。サーヴァント……よし。

「俺達は世界の外側だからな、こうして見送るぐらいしかできんが……」

——十分だよ、行ってきます。

「では、な——」

——ああ、

『因果の交差路でまた逢おう』

...

「ちよ、ちよつと待ってくれ！ 見た目の年齢はともかくとして、現代人だろうか？ 依り代を代行する擬似サーヴァントならまだしも、神秘の廃れた現代の人間が英霊にまで上り詰めるなんてことが、本当に有り得るのか!？」

「……不可能ではありません、Dr. ロマン」

「アルトリア？」

至極当然のロマンの困惑に反論したのは、意外にも召喚されたばかりのアルトリアだった。『坂井悠二』と名乗った謎のキャスターは、静かに佇み拝聴の姿勢である。

「元来『英霊』とは、こうして死後の未来に召喚されるように、時間の概念は取り払われています。それ故、過去の英霊に比べれば少ないですが、『未来の英霊が過去の聖杯戦争に召喚される』というケースも存在します」

「へえ、それは興味深い……」

「——というか、特異点Fのアーチャーがソレです。プライバシーの保護として、私の口から真名は明かしません」

「えっそうなの!？」

解決したこととはいえ、戦略レベルの情報をあっさり暴露するセイバー。

——ツクシ！……猛犬殿が噂でもしてるか？

これには錬鉄の英雄も苦笑い。

「しかしキャスター、アナタには別に伝えるべきことがあるのではないですか？」

「そりゃあ、信頼してもらうためには誠意を尽くすけど、僕自身もどこからどこまで言っつていいものやら……」

「では私からは一つ。」

——英霊の座に存在しない貴様は何者だ？」

『!？』

緩んでいた空気が一気に凍り付く。そもそも人理焼却を実行したレフ達は「カルデアをわざと見逃す」という主旨の発言を残しており、いつ態度を翻してカルデアに攻め込んできてもおかしくないのだ。その様な厳戒態勢の中に『正規ルートではない来訪者』が訪れたところで、歓迎されることは無い。

そんな警戒心は予測していたのだろう。不可視の剣を突き付けられても、自称サーヴァントは冷静に口火を切る。

「予想通り、僕は英霊じゃない。そもそも、この世界の人間ではない可

「能性が高い」

「ええええええ!?!」

「なんとっ!」

「それは、平行世界といったものでしょうか。しかし——」

「——いいや、『ifの世界』というのは実在するよ」

「そうなのですか、Dr.？」

先程アルトリアに解説を任せてしまったDr. ロマンが、今度こそ我が意を得たりと断言する。

「二人には解説していなかったけど、現存していた『魔法使い』の一人は『平行世界の運営』という能力を持っていた。彼が存在することによって、魔術師達は平行世界の存在を、見たことは無くとも認識していたんだよ」

それこそ、カルデアスを観測して人理を保障するカルデアみたいだね。と結び、ロマンは少年に対する視線を和らげる。

「そもそも、このカルデアの英霊召還システム『フェイト』は安全第一で造つてある。反英霊とかも召還しちゃうけど、世界を滅ぼそうとする極悪人はそもそも弾くようにしてあるよ」

「加えて、こうして我々と会話しようとする時点で敵ではないのでしよう。——先程はマスターの安全から詰問しましたが、カルデアを攻めに来たのであれば相応の能力・戦力を持ち込んできている筈であり、サーヴァント二騎でこうも膠着するのは不自然です」

「……疑われている立場から言うのもおかしいけれど、もう少し他人を疑っても罰は当たらないと思うよ?」

「——三者、意見が出そろいました。如何しますか、先輩」

「うえ!・あたし?」

今の今まで騎士と青年の気迫に呑まれていた一般人は、後輩からの視線で我を取り戻す。

「ええ、マスター。これから先、貴女が現場指揮官です。選択の一つ一つに、相応の責任が伴うことは免れません」

「勿論、その責任はカルデア全員で背負うものだ。立香くん一人に押しつけるなんて絶対しないよ」

「大丈夫だよ藤丸さん。諭え誰もが認めなくても、貴女がやるべきだと決めたならば、僕は全力で肯定するから」

「私だって、先輩の決断なら喜んで尊重出来ます！」

最早疑惑云々を無視してマスター訓練の様相だが、ダ・ヴィンチちゃんはとても面白いので黙っている。

「ふんぬううううう!？」

『待って、女の子がしちやいけない顔してる!？』

鬼の形相もかくやの苦悶を顔に表す(その場の全員からドン引きされている)マスターは、しかし程なくして妙案を思いつく。

「そうだ! こういう時こそ令呪だよ。——『令呪を以て命じる。坂井悠二、己の潔白を証明せよ!』」

「——委細承知、大正解だよマスター」

今まで穏やかな顔を崩さなかったキャスターに、別種の笑顔が灯る。それは、艱難辛苦に真正面から挑みかかる、燃え立つような喜びの色。

踵を返して再び召喚サークルに陣取った彼は、静かに跪きマシユの盾に手を翳す。

「〳〵廻世の行者〳〵かいせいのぎようじや坂井悠二より、いと深きに眠る御身へ——」

術式では、あり得ない。それは、世界へと呼びかける祝詞。

「此方の楯を旗印に、彼方からの他神通あれ——」

呼び声の主の身体は、炎に包まれている。世界を塗り潰す、輝かない黒の色。

「重ねて、歩いていけない隣の戦友へ——」

そして自在師は更に欲を張る。この先、自分以上の艱難辛苦を負うであろう少女に、僅かでも安らぎと力を与えるために。

「此処が目的地だ、皆の声を聴かせてくれ!」スタートライン

呼ばれた。頼られた。ならば集おう。応えよう。

——助けよう。と、焼却された世界の空白から声が届く。

「ええ。どうか貴女の旅路に、主の御加護があらんことを……。私も、

直に馳せ参じますので！」

「良いぞ！ 存分に駆け抜けよ。余と帝国<sup>ローマ</sup>が、全力で支えようぞ！」

「ハッハア！ そりやあデカイ大冒険じゃないかい。どれ、アタシも一枚噛ませておくれよ」

「随分と逆境だなあ、反逆したいのなら剣を貸して——げえ父上え!?!」

「誰も居ない世界など……治癒の歡びも、別れの悼みも在りません。どうか、救済を——」

「案ずることはありません。貴女なら大丈夫、我等が王も往くのですから、どうぞ迷わずに」

「先ずは立ち上がるがよい、雑種。貴様が人理修復に値する勇士か否か、その旅路を以て見極めるものとする！」

だから——

『どうか、進んで。その歩みを止めないで……』

今は励まししか贈れないけど、いつかきつと駆けつけるから、と。

サーヴァントなどという枷に縛られない、英霊達からの約束であった。

「——判るかい？ 藤丸さんは『唯一のマスター』だけど『孤独』ではない。諭え召還されなくても、諭え敵として立ちはだかつて、英雄達は君達を見守っているのだから。今は魔力と時間が足りないからこれが精一杯だけど……どうやら、信用は勝ち取れたみたいだね」

「うん。……ありがとう、悠二君。これから宜しくね」

「——先輩、ハンカチをどうぞ」

「うわあああんんマシユウウウウ!!」

努めて明るく振る舞っていても、やはり辛かったのは事実だったのであろう。既に限界だった立香の涙腺は、後輩からの暖かい気遣いで容易く決壊した。

感極まって後輩に抱きつく先輩と、その先輩からの愛情にフリーズした後輩を横目に、騎士王は一仕事終えた顔の少年に声を掛ける。

「先程は失礼しました。貴方に敵意が無いことは察していましたが、マスターが同席している以上、無警戒で迎える訳にはいきませんでした」

「判ってるよ、自分でも怪しき満点だと思ってたから、寧ろセイバーの姿勢は一発で信用できる」

「それはなにより。——それと、これからは真名で呼びましょう。これはサーヴァントが競い合う『聖杯戦争』ではありません。我々は仲間——同士のものですから、信頼と信用は築くべきでしょう」

「ご尤も。——宜しく、アルトリアさん」

「ええ、ユウジ。共に勝利を、我等がマスターに」

二人の騎士が強く握手を交わしている5m隣では、

「ましゅううううう！ みんなあああああ!! わたしががんばるからああああ!!」

「せんぱい、せんぱいはあゝいゝ!」

先輩と後輩が貰い泣きの悪循環に陥っていた。

...

「よし、歓迎会しよう！ マシユ、食糧庫へゴー!」

「は、ハイ!! マシユ・キリエライト、呐喊します!」

「マスター!? ユウジは兎も角、私はサーヴァントですから食事は不要——あつでもお握りは一個食べたいです!」

号泣から復活した立香は、両手に花を引き連れ居住区へと突撃していく。その後に、状況処理が追いつかず胃が軋み始めたロマンと、困難を自覚しつつも挑戦することに愉しみを感じつつあるダ・ヴィンチちゃんが続く。

悠二も苦笑いで追い掛けようとして——

——自在法の発動を察知して召還サークルを振り返った。

「よし、先輩のルート逆算が完了した。運次第だが、これで俺達も参入できる」

「グツジョブ! 只見ているだけなんてもどかしいからな、仲間全員揃ってこそその攻略だ」

「流石に、コレは不幸とか言ってられないよな……手段があるなら迷うな、そうだろ先輩!」

それは、悠二が駄目元で使ったもう一つの通信式。自分と同じ、異世界の勇士へ届けた号令への返答だった。

「——大丈夫。貴方ならきつと出来る」

「!？」

「うむ。幸い、道筋は一つでは無いようだ。 “歪み” を追えば、自ずと因果は重なるであろう」

「——ああ、そうだね」

「……悠二、マスター」

「……シヤナ、皆」

『因果の交差点でまた逢おう』

RPGのレベル上げは大好きです。

地獄とは、このような光景のことを指すのだろうか。

道が割れて、ビルが折れる。空は濁り、街は燃える。現在進行形で炎が暴れているにもかかわらず、人間——若しくは今日まで人間であった死体すら存在せず。蠢くのは骸と亡霊のみ。

大災害ですら「有り得ない」。この冬木を滅ぼしたのは、明らかに『人為的な憎悪』だったのは、疑いようもないだろう。

何もかも狂った地獄の街を、三騎のサーヴァントと一人のマスターは疾走していた。

「やあああああっつ!!」

「——ツラア！」

「せ、先輩！ 着いて来られていますか!?!」

「ゼエ——ハア——。待つ、て、まってよふたりともおお——」

——訂正する。前衛の二騎だけで、アンデッド共を蹂躪していた。

...

切欠は、崩壊したはずの特異点Fが、何時の間にか再び発生したことだ。

(よもや振り出しか)と、スタッフが涙目で観測に努めた結果——幸いにも、この空間は既に人理を焼却するほどの影響力を持たないだろう、という予測が得られた。

安心して気を緩めたDr. ロマン達とは裏腹に、サーヴァント二騎は渋い顔をする。10分程、意見交換をした後『気になることがある』と、マスター立香に進言したのだ。

「あの特異点での記憶は、座に蓄積されないように細工されていたようです。その場に居た私にさえ、不可解な点多すぎます」

「話を聞く限り、『歪みを解決した』というよりも、『元凶である聖杯を引っこ抜いたら勝手に安定した』ように見える。第一特異点の前に、冬木をもう一度調べてみないか?」

加えて、戦力の確認と連携の訓練としての意味合いもある。時間は限られているが、取り返しは効かないのだ。準備をどれだけ積み上げても足りるはずが無い。新生カルデアの二日目は、特異点Fでの実地訓練と相成った。

——とはいえ、「最初は個人個人で好きに戦うからよく見ておいて」と悠二が提案したせいで、こんな大惨事（骸骨視点）が発生しているのだが。

「キリが無いなあ……藤丸さん、少しペース上げるよ」

「同じく、薙ぎ払います。マスター」

「うそん!？」

驚愕を肯定と受け取った二騎は、一瞬息を溜めて——10体以上の骸骨を一振りで消し飛ばした。

「……凄い」

「ツヨオイ……」

迫り来る「死」を嘲笑うように、剣士と魔術士の蹂躞劇は続いている。

...

「二人とも、はしやぎ過ぎ」

「申し訳——」

「——ありませんでした」

過剰な暴走には相応の叱責である。残念ながら当然である。

結局、アンデッドが存在の危機（死んでいるが）を直感して逃走を図り出しても、アルトリア達は迅速かつ丁寧な骸骨を解体し尽くしていた。

マシユは殺気の籠もった攻撃では無く、飛び散ってくる残骸の骨を相手に防御の訓練を始め、立香は回収した『凶骨』が200本を超えた辺りで数えるのをやめた。その目は酷く据わっていた。

本来の目的を見失ったサーヴァント二騎は、火災で熱せられた地面に正座させられている。悠二は迂闊な発言の責として、適当な瓦礫を

膝上に抱かされてもいた。

「先輩、5分経過です」

「うん。——二人とも、オシオキ終わり」

氷点下だった瞳が一瞬で温かみを取り戻し、罰の終了を告げる。アルトリアは『ちよつと休んでいました』といわんばかりの動きで立ち上がり、悠二は瓦礫の塊をビルの向こうへ放り投げた（落下地点にいた哀れな骸骨が粉微塵になった）。

「さてマスター。参考にはなりましたか？」

「カツ飛び過ぎて訳判んないです……」

「うん、それが正解だよ。理解は不要だけど、認識はして欲しい。君が使う「力」は、本来人間が使うには過剰なものだということをね」

「お二人はそれを伝えるためだけに、あれ程の大暴れしたのですか？」  
「マシユ。戦場という場所では、残酷ですが『言い聞かせるより体に覚えさせた方が効率が良い』のです。先日の冬木にて、貴女達はマスターとしての心構えと、サーヴァントとしての在り方を身につけました。今日の探索も、その延長線上にあると考えてください」

「行きましょう、マスター」と、アルトリアが先導する。立香とマシユが横並びで歩き、悠二が後方を警戒しながら続く。

「わたしが、あるじ。……私が、マスター」

「先輩……」

『——集中するのは良いことだけど、気負ってはいけないよ、立香君。二人だって、君を追い詰めるためにこんなデモンストレーションをやった訳ではないのだし』

「そうだよ、今迄のが悪い例なのだから、藤丸さんがするべき事はそう多くもなければ難しくもない」

「でも……私は作戦とかは——」

「それを考えるのもサーヴァントの役目の内だ。藤丸さんに頼むのは、『戦場の俯瞰』だよ」

「ふかん？」

「ええ。戦闘中に於ける不測の事態というのは、幾ら万全を期しても発生するものです。その瞬間に気づければ御の字ですが、目の前

に敵が居てはそう上手くもいきません」

「だからこそ、戦いを見守る者として、マスターの存在は無駄じゃない。難しく考えなくても、自分に出来ることをやって欲しいんだ」

「……そっか。うん、やってみる」

「その意気です」「何事も挑戦だよ」「先輩の護衛はお任せください！」と三者三様の励ましを受けて、少女は足取り確かに地獄を歩く。

...

「そういえば、悠二君も剣使えるんだ。セイバーだったりするの?」

『あ、それはこつちでも気になるな。アーサー王の聖剣ほどではないにせよ、悠二君の剣からは、宝具に匹敵する魔力量が観測できている。というか君、ホントにキャスターだよな? さっきから斬ったり殴ったりばかりだけど!?!』

「まさか。恥ずかしながら修行不足で、術式だけだと一流キャスターには到底追いつけないだけだよ。この剣は戦利品でね、愛用してはいるけど聖剣や魔剣になるような逸話が無いのさ」

悠二はひらひらと揺らした右手を一気に振り抜き、愛剣を再び顕現させる。銀の幅広い刃に、不釣り合いに短い銀の柄、挨拶するように僅かに血色の波紋を揺らす『片手持ちの大剣』である。

「ー」ブルートザオガー”。ドイツ語で”血を吸う者”、転じて”吸血鬼”という銘だよ。僕たちはこういう摩訶不思議なアイテムを”宝具”と呼ぶのだけれど、こつちの世界では定義が違うのだろうか?」

「はい、英雄達の逸話が昇華された”ノーブルファンタズム”。サーヴァントの皆さんは、クラスの枠組みの中でその力を行使することが出来ます」

「成る程、英霊の代名詞が宝具であるならば、やっぱり僕の宝具はアレで正しいな」

今度見せてあげるね。と、悠二が剣をしまった直後、穏やかな行進が一転する。

「——っ、この殺気!?!」

「やはり此方でしたか……マシユ、ユウジ。ここからは構えて進みま



マテリアル：キャスター（擬似英霊） ☆4

「プロフィール」

真名：坂井悠二

性別：男性

出典：『灼眼のシャナ』

地域：日本（世界中での活動歴有り）

属性：秩序・中庸・人

色：黒地に銀

特技：危機に比例して冷静になる

好き：鮎料理、チョコレート、カツ丼

メロンパン、誠実な対応、素直な欲求、蛇

嫌い：セロリ、マシュマロ、マヨネーズのマスコット

無感情の正論

天敵：結構多い（本人談）

最近の悩み：後輩達に比べてどうしても地味

「ステータス」

筋力：B

耐久：A

敏捷：D

魔力：B

幸運：C

宝具：C++

「クラススキル」

・対魔力：D（条件付きでA）

「火避けの紺碧（アズール）」をはじめとした防御宝具による護り。

・陣地作成：C-

因果孤立空間「封絶」を使用可能だが、実は本人が心情的に苦手と

している。

・ 道具作成 (偽) : B-

正確には『作成』ではなく、所有する宝具・武装の多様さ。作るのは下手だが、使うのは上手い。

「固有スキル」

・ 気配感知 : B+

並のサーヴァントを超える気配感知能力。遠方でも敵味方の判別が可能であり、近距離ならば同ランクの「気配遮断」を無効化する。悠二の場合は本人の才覚(B相当)に加えて、幾つかの外的要因も加わってランクアップしている。

【敵単体の回避状態を解除。クリティカル発生率ダウン (3ターン)】

・ 存在の力 : C

自身の「存在」そのものをエネルギーとして使用する戦闘技術。Cランクの「怪力」、Bランクの「魔術 (自在法)」と同等の能力を持つ。

【自身の攻撃力と Arts 性能を UP (1ターン)。HP 減少 (ダメージリット)】

・ 怪力 : C

「人理から外れた存在」であるためにこのスキルを所持する。顔と性格とクラスに似合わず、わりと力押しで大雑把。

・ 魔術 (自在法) : B

魔術とは似て非なる現実改変——「自在法」の能力を表すスキル。かなりの万能型だが、一級のキャスタークラスに比べれば未熟が目立つ。

「宝具」

・ 「火避けの紺碧 (アズブルー)」

↓ 「莫夜凱・紺碧」

ランク : D (A) ↓ B (A)

種別 : 対火宝具

レンジ：1〜2

捕捉：5

所持しているだけでは〈対魔力・D〉に相当する魔除けの指輪だが、真名解放することで属性：炎を無効化する結果を展開する。

〈神性〉の炎には防御が1ランク落ちるが、それでも炎攻撃のみではま  
ず戦闘不能にならない。

“莫夜凱”は彼が戦闘時に使用する緋色の凱甲、敏捷と耐久を上昇  
させる。

【自身の防御力をUP（3ターン）。〈炎〉無効状態を付与（3ターン）】

↓強化後【ガッツ状態を付与（1回、1ターン）】

・“吸血鬼（ブルートザオガー）”

ランク：C+

種別：対人宝具

レンジ：1

捕捉：1

銀の刀身と金の握りの「片手持ち」の大剣。真名解放することで刀  
身に血色の波紋が揺らぎ、剣に接触した対象に呪い・斬撃ダメージを  
与える追加効果が発動する。

追加ダメージは「魔力のランク」「接触時間」に比例するため、対処  
法は「対魔力で軽減」か「剣を弾いて接触拒否」しかない。

カルデア式召喚においては、単純な攻撃バフとして扱われる。

【最終宝具】

・“文法（グランマティカ）”

ランク：C++

種別：不定（大魔術相当と思われる）

レンジ：不定

捕捉：不定

「自在法を作る自在法」「なんでもできるが、それしかできない」と称  
賛（揶揄？）される、坂井悠二の本質の顕現。

キャスタークラスでは味方の援護に特化しており、魔力の集中と防

御壁の展開を行う。

『Arts 宝具』

味方全体に回避状態を付与（1回）。スター発生率UP（3ターン）  
「Lv:—」、NP上昇量UP（3ターン）「oc対象」

「人物」

人理焼却という異常事態に対抗するため、マスターからの召還に応じた「人類史に残らない英雄」の一人。正確には「異世界人」であり、英霊「坂井悠二」の存在を偽造することでサーヴァントとしての召還に応じている。

・絆level1

一見すると普通の少年であるが、その正体はサーヴァント化以前からの『人外』。そこに至るまでの経緯は非常にややこしいので割愛するが——非常に波瀾万丈である。

・絆level2

最初は巻き込まれただけの一般人だったが、「自分が誰であろうとも、なすべき事をなす」という決意の元、世界の裏側に関わっていった結果、世界を変える戦いの最前線に躍り出た。

・絆level3

性格は温厚だがリアリスト。本質が感情ではなく理性にある。

とはいえ元々が市井の身であり、感情表現は現代人の若者とはほぼ同じ。日常生活では「微妙に要領が良い」程度の評価だが、戦場では「最善手を的確に突いてくる凶悪な頭脳派」と称される。

・絆level4

マスターに対しては、一般人出身という共通点からかなり協力的。「無理ではない範囲で、自分に出来ることをして欲しい」と考えている。

・絆level5

宝具：『文法（グランマティカ）』

彼の本質「感情ではなく理屈で決断する」を顕現させる、坂井悠二固有の自在法。

効果を一言で表せば「なんでもできる」。自在式のパーツをレンガ状のブロックに分割、之を再構築することで自分の望む効果を発動出来る。

正確な把握力

柔軟な選択力

迅速な展開力

の三拍がそろわなければ十全に力を発揮できず、マスターとの連携が鍵となる。

キヤスター補足

彼のステータスからわかる通り、セイバークラスとして召喚される可能性がある。しかし、彼の剣技そのものは「並よりちよつと上程度」であるため、最優の筈のセイバーで何故か「霊基が下がる(☆2相当)」という珍現象が起きる。

ステータスに変更はないが、スキルと宝具は以下に差し替えられる。

「クラススキル」

・対魔力：A

「火避けの紺碧」が強化され、常時発動状態になるためにランクアップ。特に炎属性については、魔力が続く限り無効化する。

・飛翔：C

〈騎乗〉スキルとの交換。短時間の空中戦闘に適應する。

「固有スキル」

・戦略：B

多人数を動員した戦場における戦術的直観力。当人の性格から、陣地防衛戦において高い補正を得られる。

味方全体のNP上昇率をアップ(3ターン)

《強化：味方全体にダメージカット付与(1回)》

・心眼(真／偽)：B+

外的要因によって植え付けられた感知能力に、彼が鍛え上げた戦闘論理を上乗せしたもの。僅かな隙を衝き、勝利の一手を導き出す。

自身に回避状態を付与（1ターン）。防御力をアップ（3ターン）。クリティカル威力をアップ（3ターン）

・存在の力：C  
キヤスターと同一。

〔宝具〕

・〃遮・吸血鬼（ブルートザオガー・エイン）〃

ランク：B

種別　：対人宝具

レンジ：2

補足　：1

刀身が大型化し、両手持ちになった〃吸血鬼〃の亜種形態。

「呪い」を押し出した第一形態と異なり、純粹に剣としての破壊力が上がっている。真名解放時の追加ダメージ効果は発動するが、効力が少し落ちる。

『Buster宝具』

敵単体に防御力無視の特大大ダメージ「Lv：」。呪い状態を付与（5ターン）「ocでダメージ上昇」

〔絆礼装〕

・〃零時迷子〃

ランク：A

種別　：対界宝具

レンジ：0

捕捉：1（自身）

「不老の恋人と共に生きるために生み出された、永久機関という秘宝中の秘宝。」

「午前零時のタイミングで、所有者の存在（＝生命力と魔力）を全快復させる」というとんでもない能力を持ち、時間・空間からの干渉もある程度無力化できる対界宝具。

しかし、以前に無理な使い方をしたせいで故障しており、宝具の修復に特化したサーヴァントでも居ない限り、使用不可能である。

『絆礼装』

坂井悠二が装備時のみ、登場から20ターン後にHP全回復。NPを300%チャージ。（1回のみ）